

1 地域がん診療連携拠点病院としての役割

当院は2007年1月28日に「地域がん診療連携拠点病院」に認定され、高度ながん診療を提供するために、認定病院に求められる様々な要件整備とがん診療関連業務の拡充を行ってきた。2010年2月に施設認定が更新された。

1 がん診療業務を支える院内体制

地域がん診療連携拠点病院として求められる診療機能が2013年から2014年にかけて見直された。多岐にわたる要件のうち、個別の項目に特化して検討協議する組織としては、がん相談支援委員会、化学療法レジメン委員会、がん登録委員会を設置している。さらにそれらの上に、院内におけるがん診療全体を管轄する組織として、がん診療連携業務委員会を設置しており、部門間の業務調整をおこなうとともに、原発不明癌等の患者さんの診療に関する「拡大がんセンターボード」の召集や、骨転移を伴う患者さんのケアを多職種で考える「骨転移ボード」の開催など、PDCAサイクルによるがん診療の質の改善に向けた活動を牽引し支持する体制を構築している。

2 外来化学療法センターの現状

現在、日本においては2人に1人ががんに罹患し、多くの患者がその合併症や治療の副作用と戦っているが、その一方で治療は大きく進歩し、多くのがん種においてがんと共存しながら仕事を継続し生活の質を維持できる外来治療にシフトしてきている。

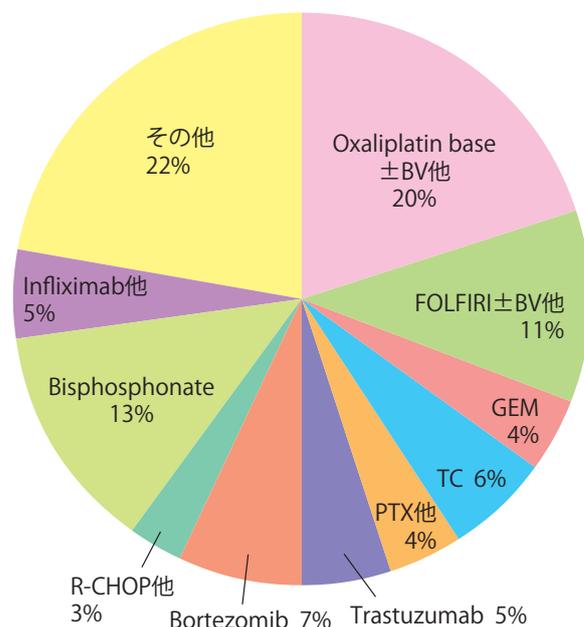
- **概要** ▶ 当院では、2007年1月に地域がん診療連携拠点病院に認定され、外来化学療法センターを設置、これまで消化器内科、呼吸器内科、血液内科、感染症内科、外科、乳腺外科、小児科、婦人科、泌尿器科、整形外科、皮膚科、腎臓内科、膠原病科の計13科について、2013年度は合計月約342件、年間4,109件のがん治療を施行した。これは開設当時の約7倍となっている。
- **スタッフ** ▶ 2008年にがん化学療法看護認定看護師が配属され、2010年1月からは専従医が勤務している。またセンター内薬剤調製室では専任薬剤師が外来患者及び入院患者に対する抗がん剤調製の業務も行っており、2013年度ののべ調製件数は入院調整5,560件、外来調整5,784件であった。
- **レジメン** ▶ 院内のレジメンはすべて癌腫ごとに登録されており、随時エビデンスに基づく更新を行い、現在総数約190である。これらは全て院内で施行している化学療法委員会で検討し承認されたものであり、医師はレジメンフォルダーからしか処方できないシステムになっているため、高い安全性を確保できている。2013年度の外来化学療法センターでの施行レジメンの内訳を図1に示す。

- **がん患者カウンセリング** ▶ 2010年10月から初診患者を中心に認定看護師と専従医により施行している。2013年度は203件であった。カウンセリングの内容としては、医師と看護師がペアとなり治療内容、有害事象の説明、確認と初期クール終了後の有害事象の評価、入院中の投与における問題点、外来化学療法を施行するに当たっての問題点、緩和ケアの必要性評価であり、それらをセルフケア支援、服薬指導、緩和ケアの導入などにつなげるべくチーム医療を根底に活動している。有害事象についてはCTCAEガイドラインにより客観的評価し、誰がいつ見ても同一基準で情報を共有できるように努めている。

また、近年注目を集めている化学療法時のB型肝炎再活性化を防ぐため、スクリーニングを全症例において徹底して行い、治療による再活性化が起きないように肝臓専門医と連携を密に行い安全な実施に努めている。

- **薬剤師の常駐** ▶ 2013年11月から患者のセルフケア能力向上、有害事象重篤化の防止、地域薬局との情報共有などを目的に、化学療法センターに薬剤師が常駐している。業務内容としては患者さんのお薬手帳に化学療法で使用する抗がん剤などの内容を記載したシールを貼布し、点滴および内服内容の確認、有害事象の評価、支持療法の処方提案などである。
- **2014年度の目標** ▶ 月診療報酬改定に伴い外来化学療法加算からホルモン注射などの投与が除かれたため、実投与目標は月約260件、年間約3,200件とする。

■ 図1 2013年度 外来化学療法センター施行レジメン



EBMに基づいたがん治療標準化をさらにめざし、各種ガイドラインを元に随時レジメンの刷新、各診療科とのCBM、がん治療勉強会の開催を行い情報発信し、地域がん拠点病院としての役割を果たしていきたい。

また、同改定に伴い一人1回であったがん患者カウンセリングは、新しくがん患者指導管理となり、治療経過中に医師、看護師、薬剤師が連携して複数回 follow up していけるシステムとなった。これを利用し、各診療科と協力しながらチーム医療を根底にすべての外来治療を受けるがん患者において精神的、身体的問題点を適正に評価し、継続的で個人に応じた質の高いがん患者を提供したいと考えている。

3 放射線治療体制の充実

2009年に最新鋭のリニアックを導入し、kVビームによる明瞭な画像による骨造影や、透視像での照射目的病巣の描出、コーンビームCTの撮像などにより、最先端の外照射が可能となった。この高性能リニアックにより、通常照射において腫瘍に対する線量集中性の向上や、正常組織への線量軽減を図るとともに、ハイテク照射である高精度放射線治療を行ってきた。2009年10月からは肺癌や肺転移、肝癌や肝転移に対する体幹部定位照射（いわゆるピンポイント照射）、2010年2月からは脳腫瘍や脳転移に対する脳定位照射、2011年2月からは強度変調放射線治療（Intensity Modulated Radiotherapy : IMRT）を開始した。またIMRTの中でも最新鋭治療とされている強度変調回転照射（Volumetric Intensity Modulated Arc Radiotherapy : VMAT）も同時に開始した。その後、IMRT・VMATの対象を全癌種に拡大し、根治照射はもとより、予防照射、緩和照射にも力を発揮してきた。2013年7月には新館への移転に伴いさらに機能が向上したリニアックを設置。2014年3月からはリニアックが2台体制とし、一層の放射線治療機能充実を図っている。

また、このような最新鋭外部照射治療のみならず、2007年から開始している子宮癌等に対するCTやMRIを併用した画像誘導の高線量率（HDR）腔内照射、2008年から開始した前立腺癌に対するヨード125シード永久挿入術、前立腺癌や子宮頸癌、乳癌術後等に対するHDR組織内照射、多発性骨転移に対するメタストロン治療などの充実した内照射、内用治療を行っている。

当院はこのように充実した外照射、内照射、内用治療を、自在に最適に組み合わせることによって、患者さんに優しいがん治療を目指しており、さらに地域がん診療連携拠点病院として技術・知識・経験の蓄積を行い、地域医療機関との連携をさらに深め、国内有数の総合的包括的放射線治療施設を目指している。

4 がん相談支援業務の現状

がん相談支援センターでは、当院に入院中や通院中の患者さんはもとより、他院で治療を受けている患者さんの相談も受け、地域におけるがん患者さんや家族への支援を行っている。緩和ケアに関する相談については、センターで充分お話を伺ったうえで必要に応じて緩和ケア外来につないだり、各診療科・がん専門外来と連携をはかっている。また平成23年9月から、京都府内共通の肺がん、胃がん、肝がん、大腸がん及び乳がんの地域連携クリティカルパス（地域連携手帳）の運用を開始し、質の高い医療提供と連携をはかっている。地域の医療機関からがん患者を受け入れ、当院で高度ながん治療を行った後に、治療の継続として地域の医療機関に紹介する、いわゆる切れ目のない地域医療連携である。在宅療養に向けた福祉介護サービス担当者との調整や、患者や家族の精神的・経済的不安に対する療養相談なども行っている。

年2回定期開催している「京都市立病院地域医療フォーラム」では、1回はがん診療関連テーマを取り上げており、地域の医療機関職員等に対する教育・啓発活動を行っている。2014年3月8日には「がん医療の充実に向けて」のテーマで『新棟整備による、がん診療機能の充実』と『緩和ケア病床の現状』について紹介した。

がん患者と家族が自由に参加でき、心の悩みや体験談を語り交流する場として、患者サロン「みぶなの会」を月2回定期開催している。2013年度は延べ354名の参加があった。がんに関する話だけでなく日常生活についての話もしながら過ごされている。また、食事の工夫・毛髪ケアについて・口内のケアについて・心のケアについてなどのテーマで、2ヶ月に1回がんに関する学習会を開催している。2013年度は、121名の参加があった。また、2010年11月に始まった乳がん患者の会「ビスケットの会」は、年3回の定例会、月1回の「乳がんサロン」を実施している。

さらに、当院は京都府がん医療戦略推進会議・相談支援部会の事務局として、京都府下のがん診療連携拠点病院と共に、がんに対する相談支援の充実に向けて組織として取り組んでいる。

5 がん登録業務の現状

2006年後半から診療情報管理室が管理する形式で国立がん研究センターの標準登録様式に則した院内がん登録制度を全診療科に適応し、このデータを基に京都府へのがん登録を行っている。院内がん登録（国立がん研究センターに報告）総数・地域がん登録（京都府に報告）総数は、2007年：773症例・710症例、2008年：940症例・865症例、2009年：1,005症例・887症例、

2010年：1,124症例・1,045症例、2011年：1,275症例・1,200症例、2012年：1,291症例・1,113症例と年々増加しており、2013年の京都府への登録数は1088症例であった。これまでの手書き記載方式は、2008年5月の電子カルテ導入により簡素化・自動化され、複数診療科からの重複登録が無くなり、2013年1月からは、ケースファインディングシステムが導入され、より正確で迅速な登録が可能になった。このような登録制度の充実を受けて、予後調査業務も診療情報管理室が一括して実施している。2009年から京都市在住の住民票照会による調査を継続的に実施している。2013年に初めて実施された「がん診療連携拠点病院院内がん登録2007年予後情報付集計」にもデータ提供を実施した。今後とも住民票照会による予後調査を行う計画である。

また、2013年12月に「がん登録推進法」が成立し、今後、全国がん登録という新たな仕組みが設けられる。病院についてはがん患者の情報提供が義務付けられることになる。当院もより精度の高いがん登録を目指し、取り組んでいく。

6 緩和医療の充実

2013年3月の新館オープンに合わせて、眺望の良い5階に植栽も施された10床の個室が緩和ケア病床として開設された。その翌年には診療部に緩和ケア科が創設され、地域に開かれた緩和ケア外来が開始された。それより以前、2006年4月に設置されていた緩和ケアチームについても人材配置・拡充が進められ、現在はかんわ療法委員会の下部組織として、緩和ケア科医師（専従）、麻酔科医師、精神神経科医師、消化器内科医師、外科医師、耳鼻咽喉科医師、歯科医師、看護師（専従、がん看護専門看護師・緩和ケア認定看護師）薬剤師（緩和薬物療法認定薬剤師）、リハビリ療法士、臨床心理士、栄養士、MSWから構成される、当院のがん診療における重要なボードに発展した。

緩和ケア科を要として、緩和ケアチーム・緩和ケア病床・緩和ケア外来が相互に有機的にリンクしながら、疼痛、嘔気、全身倦怠感、呼吸苦、せん妄、スピリチュアルペインなど、がん患者のさまざまな苦痛に対する緩和医療を展開している。緩和ケアチームの取り組みとして、がんと診断された早期からの介入を進める一方で、ターミナルステージの患者に対してはその人らしい時間を家族と過ごすことができるように、地域の医療・介護関連機関と綿密に連携して、在宅療養への切れ目のない移行を支援している。

そのほか、地域がん診療連携拠点病院として「がん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修会」を主催し（2008年度より毎年一回実施）、病院内外の医師・コメディカルを受講者として受け入れ、かんわ療法委員会が中心となって会を運営し、地域の緩和医療の啓発にも力を注いでいる。

7 がん専門メディカルスタッフによる地域貢献と人材育成

2014年現在、8名のがん看護関連の専門・認定看護師が活動している。地域人材育成支援では、がん放射線看護認定看護師教育課程教員実習受け入れや、認定看護師教育課程入学選抜試験担当者を派遣している。また、地域住民を対象としたがんサロンピアサポーター養成講座および、リレー・フォー・ライフ・ジャパン2013京都宇治太陽が丘の講師等派遣を行っている。

看護師養成事業では、臨床看護師を対象に、質の高いエンド・オブ・ライフ・ケアを学ぶためのELNEC-Jコアカリキュラム看護師教育プログラムおよび、ELNEC-Jコアカリキュラム指導者養成プログラム研修の講師を派遣している。そして、基礎教育においては、4年生大学の看護学部を対象に「緩和ケア講座」講師を派遣するなど、医療の高度化、複雑化、専門化に適切に対応できる看護師養成に協力している。

放射線治療体制の充実には、放射線治療の専門知識・技術を持った医学物理士・放射線治療品質管理士・放射線治療専門技師の配置・育成が必須であり、現在当院には3名の認定医学物理士が常勤しており、日常診療に当たるとともに、次世代の医学物理士育成にもあたっている。

薬剤科ではがん指導薬剤師1名、がん専門薬剤師2名、がん薬物療法認定薬剤師2名、緩和薬物療法認定薬剤師2名が、がん診療に関するチーム医療に従事して専門性を発揮している。

8 がん症例検討の現状と課題

がん診療は、患者さんが来院して診断や治療を受け、退院して外来通院に至るまで、医師のみならず臨床病理検査技師、放射線科技師、看護師、薬剤師、理学療法士などの多職種がかかわっていくチーム医療の原点である。当院ではがん診療連携拠点病院の指定を期に、これまでの当該診療科医師だけで行っていた症例検討を改め、多職種が参加するカンファレンス、いわゆるCancer Board Meetingを目指してきた。しかし、すべてのがん症例を多職種で検討するという本来の機能が十分に備わっていないのが現状であり、機能の充実が今後の課題である。現在、消化器、呼吸器、泌尿器、肝臓、乳腺、血液の各領域で複数診療科と職種によるがん症例の検討会が行われている。2013年度の開催実績（開催回数：検討症例数）は、消化器：97回；151症例、呼吸器：45回；354症例、肝臓：6回；9症例、乳腺：48回；143症例、造血幹細胞移植合同カンファレンス9回；27症例、血液内科・病理合同カンファレンス：12回；57症、外来化学療法：3回；6症などであった。

2 平成25年度疾患別がん診療機能、診療実績、認定資格、治療指針、治療成績等について

疾患名	治療内容	診療実績(実人数)	医師の専門分野・認定資格	使用しているガイドライン等	生存率その他特記事項
肺がん 縦隔腫瘍	手術	69例 (胸腔鏡下手術60例)	江村 正仁 呼吸器内科部長(呼吸器疾患の診断・治療、間質性肺炎の診断・治療) ・日本呼吸器学会指導医 ・日本呼吸器内視鏡学会指導医 ・日本内科学会認定医	肺癌診療ガイドライン2013年度版(日本肺癌学会) 放射線治療計画ガイドライン2012年度版(日本放射線腫瘍学会) 肺癌取扱い規約(改定第7版)2009年	非小細胞肺癌(2008~2012年度非手術症例) 1生率 34% 2生率 14% 小細胞肺癌(2008~2012年度非手術症例) 1生率 47% 2生率 17% 1995~2006年度までの手術症例の生存率 IA 77.8% IB 59.4% II 57.7% III A 23.3% III B、IV 18.4%
	化学療法	139例	中村 敬哉 呼吸器内科副部長(呼吸器疾患の診断と治療、睡眠時無呼吸症候群の診断・治療) ・日本呼吸器学会指導医 ・日本内科学会専門医 張 孝徳 呼吸器内科医員(呼吸器疾患の診断と治療) ・日本内科学会認定医 ・日本呼吸器学会専門医		
	放射線療法	56例	小林 祐介 呼吸器内科医員(呼吸器疾患の診断と治療) ・日本内科学会認定医 ・日本呼吸器学会専門医 野村奈都子 呼吸器内科医員 ・日本内科学会認定医 野溝 岳 呼吸器内科医員 ・日本内科学会認定医 五十嵐修太 呼吸器内科医員 ・日本内科学会認定医 宮原 亮 呼吸器外科部長(呼吸器外科、肺癌、縦隔腫瘍、胸腔鏡手術) ・日本胸部外科学会認定医 ・日本呼吸器外科学会専門医/評議員 ・日本外科学会専門医 ・日本臨床腫瘍学会暫定指導医 ・日本肺癌学会評議員 ・日本呼吸器学会専門医		
	セカンドオピニオンへの対応	4例	飯森 俊介 呼吸器外科医長 ・日本外科学会専門医 ・日本呼吸器外科学会専門医		
胃がん 胃腫瘍	手術	46例 (腹腔鏡下手術38例)	新谷 弘幸 副院長(消化器病、肝臓病) ・日本消化器病学会専門医(指導医) ・日本肝臓学会専門医(指導医) ・日本内科学会認定医	胃癌治療ガイドライン2010年版(日本胃癌学会) 消化器内視鏡ガイドライン2006年版(日本消化器内視鏡学会) GIST診療ガイドライン2014年(日本癌治療学会/GIST研究会)	手術症例 5年累積生存率 IA 95.8% IB 93.0% II A 83.6% II B 78.2% III A 65.1% III B 49.8% III C 13.5% IV 4.3% 全体 69.1% (2012年3月末現在)
	内視鏡的切除術(EMR-ESD)	46例	吉波 尚美 総合内科部長(消化器病、肝臓病、内視鏡) ・日本内科学会専門医 ・日本消化器病学会専門医(指導医) ・日本消化器内視鏡学会専門医(指導医) ・日本肝臓学会専門医(指導医) ・日本がん治療認定医機構認定医		
	化学療法	60例	桐島 寿彦 消化器内科副部長(消化器病、肝臓病、がん薬物療法) ・日本内科学会認定医 ・日本消化器病学会専門医(指導医) ・日本消化器内視鏡学会専門医(指導医) ・日本肝臓学会専門医(指導医) ・日本がん治療認定医機構認定医 ・日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医		
	放射線治療	4例	山下 靖英 内視鏡室副部長(消化器病、内視鏡) ・日本内科学会認定医 ・日本消化器病学会専門医 ・日本消化器内視鏡学会専門医(指導医) ・日本がん治療認定医機構認定医		
	セカンドオピニオンへの対応	0例	西方 誠 総合内科・消化器内科医長(消化器病) ・日本内科学会認定医 ・内視鏡学会認定医 元好 貴之 消化器内科医長(消化器病) ・日本内科学会認定医 ・日本消化器病学会専門医 ・日本消化器内視鏡学会専門医(指導医) ・日本がん治療認定医機構認定医		
大腸がん 大腸腫瘍	手術	105例 (腹腔鏡下手術86例)	宮川 昌巳 ・日本内科学会認定医 ・日本消化器病、消化器内視鏡、肝臓各学会の専門医 ・日本がん治療認定医機構認定医	大腸癌治療ガイドライン2014年版(大腸癌研究会) GIST診療ガイドライン2014年(日本癌治療学会/GIST研究会) 放射線治療計画ガイドライン2012年度版(日本放射線腫瘍学会)	手術症例 5年累積生存率 0 100.0% I 96.0% II 87.7% III A 76.3% III B 58.8% IV 17.7% 全体 71.1% (2012年3月末現在)
	内視鏡的切除術(EMR-ESD)	224例	高井 孝治 消化器内科医員(消化器病) ・日本内科学会認定医 ・日本がん治療認定医機構認定医 ・日本消化器病、消化器内視鏡、肝臓各学会の専門医		
	化学療法	154例	岡本 直樹 ・日本内科学会認定医		
	放射線治療	4例	森本 泰介 副院長(一般外科、消化器外科、肝臓外科) ・日本外科学会専門医(指導医) ・日本消化器外科学会専門医(指導医) ・日本がん治療認定医機構暫定教育医 ・日本肝胆膵外科学会高度技能指導医		
	穿孔療法(PEI/RFA)	67(27/40)例	山本 栄司 外科部長(一般外科、消化器外科) ・日本外科学会専門医(指導医) ・日本消化器外科学会専門医(指導医) ・日本がん治療認定医機構暫定教育医、認定医		
	セカンドオピニオンへの対応	1例	松尾 宏一 外科副部長(一般外科、消化器外科) ・日本外科学会専門医		
肝がん 肝腫瘍	手術	11例	里 輝幸 外科副部長(一般外科、消化器外科、外傷) ・日本外科学会専門医 ・JATECインストラクター	肝がん診療ガイドライン2013年版(科学的根拠に基づく肝癌診療ガイドライン作成に関する研究班)	手術症例 5年累積生存率 53.1% (2012年3月末現在)
	化学療法	20例	上 和広 外科副部長(一般外科、消化器外科) 小濱 和貴 外科副部長(一般外科、消化器外科) ・日本外科学会専門医(指導医) ・日本消化器外科学会専門医(指導医) ・日本内視鏡外科学会技術認定取得者 ・日本消化器病学会専門医		
	放射線治療	4例	伊藤 鉄夫 外科医長(一般外科、消化器外科) ・日本外科学会専門医 ・日本消化器外科学会専門医 ・日本がん治療認定医機構認定医		
	穿刺療法(PEI/RFA)	67(27/40)例	玉置 信行 外科医長(一般外科、消化器外科) ・日本外科学会専門医 ・日本消化器外科学会専門医		
	セカンドオピニオンへの対応	0例	玉木 一路 外科医員(一般外科、消化器外科) ・日本外科学会専門医 ・日本がん治療認定医機構がん治療認定医		
食道がん	手術	3例	久保田 恵子 外科医員(一般外科、消化器外科) ・日本外科学会専門医 ・日本乳癌学会認定医 ・日本がん治療認定医機構がん治療認定医	食道癌治療ガイドライン2012年版(日本食道疾患研究会) 放射線治療計画ガイドライン2012年度版(日本放射線腫瘍学会)	手術症例 5年累積生存率 47.7% (2012年3月末現在)
	内視鏡的切除術(EMR-ESD)	7例	井上 英信 外科医員(一般外科、消化器外科) ・日本外科学会専門医		
	化学療法	6例	花本 浩一 外科医員(一般外科、消化器外科) ・日本外科学会専門医		
	放射線治療	7例	上本 裕介 外科専攻医(一般外科、消化器外科)		
	放射線治療	7例			
	セカンドオピニオンへの対応	1例			
胆管がん 胆嚢がん	手術	3例		胆道癌診療ガイドライン(第1版)(日本肝胆膵外科学会、日本癌治療学会)	手術症例 5年累積生存率 58.2% (2012年3月末現在)
	化学療法	9例			
	放射線治療	0例			
	セカンドオピニオンへの対応	0例			
膵がん 膵腫瘍	手術	7例		膵癌診療ガイドライン2009年版(日本膵臓学会) IPMN/MCN国際診療ガイドライン2012年版(国際膵臓学会ワーキンググループ)	手術症例 5年累積生存率 30.1% (2012年3月末現在)
	化学療法	33例			
	放射線治療	5例			
	セカンドオピニオンへの対応	0例			

V がん診療業務概要

平成25年度疾患別がん診療機能、診療実績、認定資格、治療指針、治療成績等について

疾患名	治療内容	診療実績(実人数)	医師の専門分野・認定資格	使用しているガイドライン等	生存率その他特記事項
乳がん 乳腺腫瘍	手術	52例	森口 喜生 乳腺外科部長(一般外科、消化器外科、乳腺外科) <ul style="list-style-type: none"> 日本外科学会専門医(指導医) 日本乳癌学会専門医 日本がん治療認定医機構暫定教育医 	乳腺診療ガイドライン2013年版(日本乳癌学会) NCCNガイドライン2014年版	手術症例 10年累積生存率 I 94.3% II A 88.9% II B 84.4% III A 75.1% III B 65.3% IV 28.8% 全体 83.9% (2012年3月末現在)
	化学療法	355例			
	放射線療法	137例			
	セカンドオピニオンへの対応	1例			
前立腺がん	手術	64例 (腹腔鏡下手術、ロボット手術計56例)	清川 岳彦 泌尿器科部長(泌尿器科癌、前立腺癌、腹腔鏡手術) <ul style="list-style-type: none"> 日本泌尿器科学会専門医(指導医) 日本内視鏡外科学会腹腔鏡技術認定医 日本泌尿器内視鏡学会腹腔鏡技術認定医 ダウインチ手術支援ロボット コンソール術者認定医 	前立腺癌診療ガイドライン2012年版(日本泌尿器科学会) 放射線治療計画ガイドライン2012年度版(日本放射線腫瘍学会) 前立腺癌検診ガイドライン2010年増補版(日本泌尿器科学会)	
	化学療法(ホルモン療法)	194例			
	放射線療法(組織内照射)	0例			
	放射線療法(外照射)	32例			
	セカンドオピニオンへの対応	0例			
膀胱がん	手術(膀胱全摘)	10例 (腹腔鏡下手術10例)	清川 岳彦 泌尿器科部長(泌尿器科癌、前立腺癌、腹腔鏡手術) <ul style="list-style-type: none"> 日本泌尿器科学会専門医(指導医) 日本内視鏡外科学会腹腔鏡技術認定医 日本泌尿器内視鏡学会腹腔鏡技術認定医 ダウインチ手術支援ロボット コンソール術者認定医 	膀胱がん診療ガイドライン2009年(日本泌尿器科学会)	
	経尿道的膀胱腫瘍切除(TUR)	157例			
	化学療法(膀胱注入含む)	97例			
	放射線治療	0例			
	セカンドオピニオンへの対応	0例			
腎盂尿管がん	手術	17例 (腹腔鏡下手術13例)	吉田 徹 泌尿器科副部長(泌尿器科癌、泌尿器科手術) <ul style="list-style-type: none"> 日本泌尿器科学会専門医(指導医) 日本内視鏡外科学会腹腔鏡技術認定医 日本泌尿器内視鏡学会腹腔鏡技術認定医 ダウインチ手術支援ロボット コンソール術者認定医 船田 哲 泌尿器科医員 <ul style="list-style-type: none"> 日本泌尿器科学会専門医 ダウインチ手術支援ロボット コンソール術者認定医 	腎盂尿管癌診療ガイドライン2014年(日本泌尿器科学会)	
	化学療法	9例			
	放射線療法	1例			
	セカンドオピニオンへの対応	0例			
精巣がん	手術	5例		精巣腫瘍診療ガイドライン2009年版(日本泌尿器科学会)	
	化学療法	1例			
	放射線療法	0例			
	セカンドオピニオンへの対応	0例			
腎がん	手術	25例 (腹腔鏡下手術23例)		腎癌診療ガイドライン2011年版(日本泌尿器科学会)	
	化学療法	13例			
	放射線療法	2例			
	セカンドオピニオンへの対応	0例			
子宮がん	手術	60例	藤原 葉一郎 産婦人科部長(婦人科腫瘍、周産期管理、産婦人科感染症、性感染症) <ul style="list-style-type: none"> 日本産科婦人科学会専門医(暫定指導医) 日本婦人科腫瘍学会婦人科腫瘍専門医 日本周産期・新生児医学会周産期(母体・胎児)専門医 日本性感染症学会認定医 臨床遺伝専門医 山本 浩之 産婦人科副部長(周産期管理) 日本産科婦人科学会専門医	子宮頸癌治療ガイドライン2011年版(日本婦人科腫瘍学会編) 子宮体癌治療ガイドライン2013年版(日本婦人科腫瘍学会編) 放射線治療計画ガイドライン2012年度版(日本放射線腫瘍学会)	
	化学療法	31例			
	放射線療法	37例			
	セカンドオピニオンへの対応	0例			
卵巣がん	手術	16例	森崎 秋乃 産婦人科医長(産婦人科一般) 日本産科婦人科学会専門医 大井 仁美 産婦人科医員(産婦人科一般) 日本産科婦人科学会産婦人科専門医 舟木 紗綾佳(産婦人科一般)	卵巣がん治療ガイドライン2010年版(日本婦人科腫瘍学会編) 放射線治療計画ガイドライン2012年度版(日本放射線腫瘍学会)	
	化学療法	18例			
	放射線療法	1例			
	セカンドオピニオンへの対応	0例			

2 平成25年度疾患別がん診療機能、診療実績、認定資格、治療指針、治療成績等について

疾患名	治療内容	診療実績(実人数)	医師の専門分野・認定資格	使用しているガイドライン等	生存率その他特記事項
頭頸部がん	手術	28例	豊田 健一郎 耳鼻咽喉科部長(耳鼻咽喉科一般) ・日本耳鼻咽喉科学会専門医 ・日本気管食道科学会専門医 井上 麻美 耳鼻咽喉科副部長(耳鼻咽喉科一般) ・日本耳鼻咽喉科学会専門医	放射線治療計画ガイドライン2012年度版(日本放射線腫瘍学会) がん疼痛ガイドライン(日本緩和医療学会) 頭頸部がん診療ガイドライン2013年度版(日本頭頸部外科学会) 口腔がん診療ガイドライン2013年度版(日本口腔腫瘍学会、日本口腔外科学会)	
	化学療法	43例			
	放射線療法	25例			
	セカンドオピニオンへの対応	0例			
甲状腺がん	手術	27例	豊田 健一郎 耳鼻咽喉科部長(耳鼻咽喉科一般) ・日本耳鼻咽喉科学会専門医 ・日本気管食道科学会専門医 井上 麻美 耳鼻咽喉科副部長(耳鼻咽喉科一般) ・日本耳鼻咽喉科学会専門医 小松 弥郷 内分泌内科部長(内分泌代謝学一般) ・日本内分泌学会専門医(指導医) 篠谷 雄二 内分泌内科副部長(内分泌代謝学一般) ・日本内分泌学会専門医(指導医) ・日本甲状腺学会専門医	甲状腺癌取り扱い規約第6版(甲状腺外科学会) 放射線治療計画ガイドライン2012年度版(日本放射線腫瘍学会) 甲状腺腫瘍診療ガイドライン2010年度版	
	化学療法	0例			
	放射線療法	6例			
	セカンドオピニオンへの対応	1例			
血液腫瘍(白血病リンパ腫など)	化学療法	156例	伊藤 満 血液内科部長(臨床血液学、造血器悪性疾患の治療、造血幹細胞移植) ・総合内科専門医 ・日本造血細胞移植学会造血細胞移植認定医 ・日本血液学会専門医(指導医) ・日本臨床腫瘍学会暫定指導医 ・日本がん治療認定医機構認定医・暫定教育医 宮原 裕子 血液内科副部長(臨床血液学、造血器悪性疾患の治療、造血幹細胞移植) ・日本血液学会専門医 ・日本臨床腫瘍学会暫定指導医 ・日本がん治療認定医機構認定医・暫定教育医 松井 道志 血液内科医長(臨床血液学、造血器悪性疾患の治療、造血幹細胞移植)	造血器腫瘍取り扱い規約2010年3月 第1版(日本血液学会) 造血器腫瘍診療ガイドライン2013年版(日本血液学会) 造血細胞移植学会ガイドライン(日本造血細胞移植学会)	血液内科 非血縁者間骨髄移植・末梢血幹細胞移植や臍帯血移植にも対応している。 ミニ移植やHLA一部不適合ドナーからの移植も行っている。 自家末梢血幹細胞移植5年生存率(全例)68.3%
	移植	(同種移植)4例 (自家移植)3例			
	放射線治療	24例			
	セカンドオピニオンへの対応	0例			
	無菌治療室設置の有無(病床数)	11床			
小児血液腫瘍 小児腫瘍	化学療法	8例	黒田 啓史 小児科部長(血液・悪性腫瘍) ・日本小児科学会専門医 ・日本がん治療認定医機構暫定教育医・認定医 ・日本血液学会専門医 ・日本小児血液・がん学会暫定指導医 ・日本造血細胞移植学会認定医 清水 恒広 感染症科部長(感染症一般・小児血液・腫瘍性疾患の診断と治療) ・日本小児科学会専門医 田村 真一 小児科医長(血液・悪性腫瘍) ・日本小児科学会専門医 ・日本がん治療認定医機構認定医 ・日本血液学会専門医 ・日本小児血液・がん学会暫定指導医	日本小児白血病リンパ腫研究グループ(JPLSG):AML-Dll、ALL-B12、ALL-Ph13、AML-T12、LLB-NHL-03、ALL-R08、MLL-10、JMML-11、TAM-10、ALL-T11、LCH-12 日本神経芽腫研究グループ(JNBSG)治療指針	造血細胞移植に力を入れている。
	移植	(同種移植)2例			
	手術	0例			
	放射線治療	3例			
	セカンドオピニオンへの対応	0例			
	無菌治療室設置の有無(病床数)	3床			
脳腫瘍	手術	27例	村井 望 脳神経外科部長(脳神経外科一般) ・日本脳神経外科学会専門医 岡本 洋 脳神経外科医長(脳神経外科一般) ・日本脳神経外科学会専門医 河原崎 知 脳神経外科医長(脳神経外科一般) ・日本脳神経外科学会専門医	放射線治療計画ガイドライン2012年度版(日本放射線腫瘍学会)	
	化学療法	2例			
	放射線療法	31例			
	セカンドオピニオンへの対応	0例			
性腺外胚細胞腫瘍	手術	21例	宮原 亮 呼吸器外科部長(呼吸器外科、肺癌、縦隔腫瘍、胸腔鏡手術) ・日本外科学会専門医 ・日本胸部外科学会認定医 ・日本呼吸器外科学会専門医評議員 ・日本臨床腫瘍学会暫定指導医 ・日本呼吸器学会呼吸器専門医 藤原 菜一郎 産婦人科部長(婦人科腫瘍、周産期管理、産婦人科感染症、性感染症) ・日本産科婦人科学会専門医 ・日本婦人科腫瘍学会婦人科腫瘍専門医 ・日本周産期・新生児医学会周産期(母体・胎児)専門医 ・日本性感染症学会認定医 ・臨床遺伝専門医 清川 岳彦 泌尿器科部長(泌尿器科癌、前立腺癌、腹腔鏡手術) ・日本泌尿器科学会専門医(指導医) ・日本内視鏡外科学会腹腔鏡技術認定医 ・日本泌尿器内視鏡学会腹腔鏡技術認定医 ・ダヴィンチ手術支援ロボット コンソール術者認定医	放射線治療計画ガイドライン2012年度版(日本放射線腫瘍学会) 肺癌診療ガイドライン2013年度版(日本肺癌学会) 肺癌取り扱い規約(改訂第7版)2009年 精巣腫瘍診療ガイドライン2009年版(日本泌尿器科学会) 子宮頸癌治療ガイドライン2011年度版(日本婦人科腫瘍学会編) 子宮体癌治療ガイドライン2013年度版(日本婦人科腫瘍学会編) 卵巣がん治療ガイドライン2010年度版(日本婦人科腫瘍学会編)	
	化学療法	0例			
	セカンドオピニオンへの対応	0例			

疾患名	治療内容	診療実績(実人数)	医師の専門分野・認定資格	使用しているガイドライン等	生存率その他特記事項
骨軟部腫瘍	手術	2例	大津 修二 放射線治療科部長 ・日本医学放射線学会治療専門医 立入 誠司 放射線治療科副部長 ・日本医学放射線学会治療専門医 ・日本医学放射線学会医学物理士 ・放射線治療品質管理機構放射線治療品質管理士 ・日本がん治療認定医機構暫定教育医 認定医 ・日本乳癌学会乳腺専門医	放射線治療計画ガイドライン2012年度版(日本放射線腫瘍学会)	
	化学療法	0例	田中 千晶 整形外科部長 ・日本整形外科学会専門医 ・日本リウマチ学会リウマチ専門医 ・日本整形外科学会脊椎脊髄病医 ・日本リハビリテーション医学会認定臨床医		
	放射線療法	80例	鹿江 寛 リウマチ科部長 ・日本整形外科学会専門医 ・日本整形外科学会認定リウマチ医 ・日本整形外科学会認定スポーツ医 ・日本リウマチ学会リウマチ専門医		
	セカンドオピニオンへの対応	0例	多田 弘史 脊椎外科部長 ・日本脊椎脊髄病学会脊椎脊髄外科指導医 ・日本整形外科学会専門医 ・日本整形外科学会脊椎脊髄病医 西村 毅 歯科口腔外科部長 ・日本口腔外科学会専門医 ・厚生労働省認定歯科医師臨床研修指導医 白井 陽子 歯科口腔外科副部長 ・厚生労働省認定歯科医師臨床研修指導医		
皮膚腫瘍	手術	28例	小西 啓介 皮膚科部長(皮膚科全般) ・日本皮膚科学会認定皮膚科専門医(指導医)	皮膚悪性腫瘍ガイドライン(日本皮膚科学会)	集学的治療を要する場合は、京都府立医科大学附属病院へ紹介(10例)
	化学療法	0例			
	放射線治療	0例			
	セカンドオピニオンへの対応	0例			
原発不明がん	手術	1例	すべてのCancer Board Meeting が合同で症例検討し、担当診療科を決定	原発不明がん診療ガイドライン2010年版	
	化学療法	0例			
	セカンドオピニオンへの対応	0例			
眼腫瘍	手術	0例	小泉 閑 眼科部長(網膜硝子体疾患) ・日本眼科学会専門医		
	化学療法	0例	鈴木 智 眼科副部長(角膜疾患) ・日本眼科学会専門医 ・日本抗加齢医学会専門医		
	眼動注	0例	鎌田 さや花(旧姓 中村) 眼科医員(眼科一般・斜視) ・日本眼科学会専門医		
	セカンドオピニオンへの対応	0例	三重野 洋喜 眼科医員(網膜硝子体疾患) ・日本眼科学会専門医		
脊椎腫瘍	手術	1例	多田 弘史 脊椎外科部長 ・日本脊椎脊髄病学会脊椎脊髄外科指導医 ・日本整形外科学会専門医 ・日本整形外科学会脊椎脊髄病医	放射線治療計画ガイドライン2012年度版(日本放射線腫瘍学会)	主に癌の脊椎転移による脊髄麻痺に対する手術を行っている。
	化学療法	0例			
	放射線治療	0例			
	セカンドオピニオンへの対応	0例			
その他のがん	手術	0例			
	化学療法	6例			
	放射線治療	1例			
	セカンドオピニオンへの対応	0例			

2 平成25年度疾患別がん診療機能、診療実績、認定資格、治療指針、治療成績等について

疾患名	治療内容	診療実績(実人数)	医師の専門分野・認定資格	使用しているガイドライン等	生存率その他特記事項
放射線診断・治療	放射線治療・IVR実績は各疾患欄に集約して記載済み	0例	藤本 良太 放射線診断科部長 ・日本医学放射線学会放射線診断専門医 谷掛 雅人 放射線診断科副部長 ・日本医学放射線学会放射線診断専門医 ・日本 IVR 学会専門医 大津 修二 放射線治療科部長 ・日本医学放射線学会放射線治療専門医 立入 誠司 放射線治療科副部長 ・日本医学放射線学会放射線治療専門医 ・日本医学放射線学会医学物理士 ・放射線治療品質管理機構放射線治療品質管理士 ・日本がん治療認定医機構暫定教育医・認定医 ・日本乳癌学会乳腺専門医 森澤 信子 放射線診断科医長 ・日本医学放射線学会放射線診断専門医 ・核医学専門医 ・PET核医学認定医 里上 直衛 放射線診断科医長 ・日本医学放射線学会放射線診断専門医	放射線診療計画ガイドライン2012年版(日本放射線学会)	
	セカンドオピニオンへの対応				
病理診断			岩佐 葉子 病理診断科部長 ・日本病理学会認定病理専門医 ・日本臨床細胞学会細胞診断専門医(指導医) 河野 文彦 病理診断科医長 ・日本病理学会認定病理専門医	肺癌取り扱い規約(改訂第7版) 縦隔腫瘍取り扱い規約(第1版) 胃癌取り扱い規約(第14版) 大腸癌取り扱い規約(第8版) 原発性肝癌取り扱い規約(第5版) 食道癌取り扱い規約(第10版) 胆道癌取り扱い規約(第6版) 膵癌取り扱い規約(第6版) 乳癌取り扱い規約(第17版) 前立腺癌取り扱い規約(第4版) 腎盂・尿管・膀胱癌取り扱い規約(第1版) 精巣腫瘍取り扱い規約(第3版) 腎癌取り扱い規約(第4版) 子宮頸癌取り扱い規約(第3版) 子宮体癌取り扱い規約(第3版) 卵巣腫瘍取り扱い規約(第2版) 頭頸部癌取り扱い規約(第5版) 甲状腺癌取り扱い規約(第6版) 脳腫瘍取り扱い規約(第3版) 悪性骨腫瘍取り扱い規約(第3版) 絨毛性疾患取り扱い規約(第3版)	